

友と別れて

村松武司

行かんと決めたよ。
領事がケントの箱をかかえて
成長した韓国
いちど自分の眼で見てこいよ。
その日はまだ光州は陥ちていず
決めかねていたんだが
行かんと決めたよ。用はないんだ。

船が灯りをつけて黒い河を遡る。
雨が降るわけではなく酔いどれてもいず
水面がちらちら光り、その散乱に
動かぬ一艘が、残った木の葉のように
セメントの岸壁に貼りついたまま。

安ホテルの窓から見下すおれがいる。

すべてを見終ってもいないのに

何処にも行かぬと決めて

この部屋が世界の終点にみえる。

領事のケントは甘く、からだは重く、

自動販売器から転げ落ちた炭酸瓶

と、あと数滴のウイスキー。

友よ、おきな馴染よ

保証できない、行くな、と

どれほど言っただけだったか。

部屋のドアを閉じ

暑い夜を反転しつつ光州の最後をみる。

ほんとはどこでも死ねる身だが

どこで死ぬべきかだけがわからない

いつものようになく詩を書くときのような

おれの本心と、どこかちがう水平線。

後頭部を浮かべて

黒い波に揺られている、おれも在日。

国境はなぜに

長谷川七郎

国境はなぜに
かくも佗びしく華やぐか
黄金の三角地帯の中心とよばれる古い町なみ
道路から立ちのぼる熱気が
陽炎となつてゆらめく
はためく国旗や遮断機
いかめしい鉄門扉にさえぎられた橋の真中が国境だが
貧しい日用雑貨や 季節の果物 野菜を商う露店がひ
しめき
架台からこぼれぶち割られたドリアン
黄色い果肉から強い芳香があたりひろがる
延々 南と北をつらぬき 西と東を結ぶ
生活物資の大輸送道路の終着点
だが 酒 煙草 宝石
麻薬 武器の密輸も
ここを通過して運ばれると

ガイドブックは事も無げに記している

*

石段にそつて

素朴な彩色の仏像が五体

その後は 神話にかたどった 多頭の大蛇の胴が

うねった手すりになつて 頂上に伸びている

青い蝸の置物にかこまれ 金箔の剝げおちた本尊に

夏がすぎてゆく 気怠い暑さの中で

羽根のある木の実が爆ぜて舞いおちる

盛りをすぎた火炎樹の

枝をすかした目の下の

ズーム アップされた国境の橋

頬に香木の粉をなすつて装った物売りのビルマオンナ

ゆつくりと徘徊する警備員

水の濁れた橋下で群れ遊ぶ子供ら

頭に荷を載せ 橋ぞいの間道に消える

黒っぽい装束の山岳少数民族の列

橋の向こう側は 暗い杜がつづき

いんいんとして なにも見えない

孝ノ始メ

宮田 正平

悲鳴を聞いて
 兵隊たちが駆けつけた時
 右手を握りしめて 彼は
 薬のなかを転げまわっていた
 右人差指が付根から落とされ
 斬られた指が土気色して
 押切のそばにあった
 過失にしては
 見事というほかなかった
 ことの顛末について 当然
 厳しい追咎を受けたが
 予期した苛烈な責苦はなく
 薄気味悪かった
 ともあれ 彼は
 頑として言いはった
 過失であると言いはった
 手元が狂ったのだと言いはった
 (左利きではなかったのに
 なぜかそのことは不問に付された)

彼の所業が故意であれば
 班長の 週番士官の 中隊長の 部隊長の
 責任が問われ 成績にひびく
 だからおおかたの事件や不始末は
 せいぜい中隊どまりで
 にぎり潰され もみ消される
 軍隊のそんなアキレスを
 彼は知らなかった
 知らなかったから必死に強弁した
 重営倉を覚悟で強弁した
 見も知らず
 恨み辛みのない者同志が
 傷つけ殺し合うことの不条理が
 納得できなかった
 老いたふた親と女房・子を遺して
 名譽の戦死をする気には
 なれなかった
 考えあぐね悩みぬいた末の
 「過失」だった
 一件は演習中の事故として処理され
 彼は軍籍を解かれた
 以来 四十年
 北の島 南のジャングルで

死んだ戦友や同期の仲間に
 掌を合わせることはあつても
 「戦友会」の案内を
 手にとつて見たことはない
 七十に手が届こうといういま
 髪はすっかり白く
 陽灼けた顔に皺が深く
 五人の孫に囲まれて
 出稼ぎの息子に代つて嫁を助け
 米を作り 野菜を作り
 牛を飼い 豚を飼い
 馬耕も田植も稲刈も
 機械がみんなやつてくるるけん
 きょうびの百姓仕事は
 やさしかもんばい
 指の一本や二本なかってちゃ
 どぎゃんもなか
 屈託なく笑う柔和な目に
 己を貫いて生きてきた男の
 揺ぎない力が
 籠っていた
 身体髪膚コレヲ父母ニ受ケ
 敢エテ毀傷セザルハ孝ノ始メナリ

手紙

— K に —

寺島 珠雄

シロワという蜜柑の木数本。
 それから孟宗竹の林に
 太くて高い栗の木もある斜面から
 すぐ山だった。

K —

きみよりも
 きみの家の裏手を
 覚えているような気がする。
 まして山の
 子どもには密林と絶壁だったあそこの
 さらりと黄色くあたたかい山砂に寝ころべる洞窟をき
 みは知らないだろう。
 おれは夢にも見るけどね。

なぜか「少年倶楽部」のように認められない「譚海」
 を

「譚海」もね。

おれはその洞窟で読んだ。
 そして空想していた。
 ここにこのままじいっとじいっと寝て。
 じいっとじいっと寝て。
 じいっとじいっとで。
 それは「戸沢白雲齋」になることと死ぬことのまじり
 合いだった。多分。

K —

あの山とは言わない。
 あの洞窟だけ
 おれに貸してくれよいますぐに。
 遠くに海がきこえて
 上の方で赤松林が鳴って
 静かな
 山砂の
 黄の褥とこを。

バカ貝挽歌

河合俊郎

夜目にもくつきり、節くれだつた老漁夫の指さす方向に、赤い漁灯、黄色い灯、三隻五隻、日出沖五百メートルに近づく。来たぞ、バカ貝採りだ。船をさげろ。無線を入れる。潮枯れ声がわめく。保安庁船、保安庁船、ドウゾ、密漁船が来ました。ドウゾ。

こんなちっぽけな船じゃあかなわんわい。敵さん物凄いいエンヂンの音とともにサンドポンプを海底に噴きつけ、舞いあがるバカ貝をマンガで吸いとり、あつという間に貝満載、沖へ向かって逃げてしまふ。保安庁船がサーチライトを照らして拡声器で呼びだしたころは裳抜けのから、沖で灯を消し、暗い波音ばかり。

事のおこりは三年前、渥美半島日出沖にバカ貝が大量発生し、地元の伊良湖岬漁協のイワサ組合長は、三河湾側の小中山漁協イド組合長と共謀して、入り会い協定をむすんで共同採取を許した。一シーズン五億を超える水揚げに、百姓を捨てて小型底引船に乗る者。

大型船に改造する者、百隻以上が日出沖へむらがつた。

ところが、一九七九年の暮ごろから、小中山船の採取技術の機械化に押されて、半農半漁の伊良湖船の素人技術ではおこぼれ程も採ることができない。おれたちの漁区だもう来てくれるな。入り会い協定がある共同採取だと紛争がはじまり、仲たがいは船の上で棒のなぐりあいまで表面化した。

そこで、愛知県水産振興室のえらいさまが、県漁業調整規則にもとずいて、どちらにも採取許可を出さず、禁漁命令を宣告した。みすみす五億のバカ貝水揚げをやりすごすことになってしまった。バカ貝の寿命は二年か三年、後何年も豊漁は続かない。惜しい、盗め、夜の海の攻防が始まったというわけ。

金にからんでイワサ組合長は首になり、新しい役員が選ばれ、大声のヤアサ新組合長は、誰が何というおうと単独採取だ、よその船は一隻も入れんと怒鳴ってきかないが、毎夜毎夜のドロボウ船の見張りにはうんざり、仲秋の名月というのに肌寒い砂浜で、ひとつかみのバカ貝が鳴いた。

(一九八〇・九・二七)

コーヒー店のユニフォーム

秋山清

重たく
大げさに
足をはこんで来て
盆の上のカップとスプーンと
砂糖壺と、たどたどしく並べる。
それをあぶなつかしく思ったのは
こっちの責任かもしれぬ。
次にはポットを
抱えるように持って来て
熱心に熱いのを注いだ。
からだの右半分がギクシヤク
前に前に出たがる。
口を大きくあける。

濃い眉と
青い剃りあと。
アリガトウゴザイマス、と
ゆっくり、ゆっくり、いってから
伝票を押しつけるように置いた。
仲間のところへ戻って行って
何やら挨拶。
五、六人の男と女も
「……つてらっしゃあい」とそれに応じた。
始動ののろい足。

踏みつけるように二歩、三歩。
ちよつとこつちを見てから
奥にはいった。
肩から大きく
縦に二本。
白地に黒線のはいつたのを彼も着ている。
店のユニフォームだろう。

(一九八〇・七)

ある銃口

吉田欣一

うしろには眼がないから
うしろからしのびよってくる気配とか
うしろから追い越して行く時間とか
見えないカオスのなかで
事件ははじまっている。
ふと気づくと
もう振り返ることも出来ない。
そうだ昔から
ここ岐阜は木の国山と言われたところ
恵まれた自然と平和と生活のあったところ
北アルプス連峰の雪崩のように
静かな岐阜の街の地底から
地鳴りがとどろいてくる。
向うからの地鳴りに呼応するように。
カボチャを切り刻むように

人間が人間を殺している。
石つぶて投げた
老若男女を問はず
戒厳軍と云う軍隊が殺している。
その国土はふみにじられている。
号泣は街に溢れて
血まみれになって帰って来た私の前に
戦車と鉄かぶとがずらりと並ぶ
すでに視力の衰えた眼をいっぱい開き
私は前方を凝視する
そこに何かがあるか。
生きているうちは闘わなくてはならぬ。
やっぱりお前だったか
私の首筋に
びたり銃口を突きつけているのは。

漂う

申 有人

赤提灯を消し 店を閉める。
午前二時
今日の最後を弔うため
酒瓶とコップを持ち 無人のカウンターに向う。
誰も見てない場末のゴミ箱に
首突っこむ犬ころのように。
夜の海が微かなリクイエムを送る。
白い波が闇に砕け
重いしじまを研いで
潮風は血の匂いが漂う。
私の眼を釘づけにする
「光州民衆蜂起」のパンフとカンパ箱。
「全羅道の地 古来性兇悪にして有毒の地」
封建君主を懐えさせた
全鮮第一の穀倉地帯 全羅道。
かれらが涎を流した領地がなぜ有毒の地になったか。
全羅道の絶粒農民だけが知っている。
一匹のゴキブリが私のコップの周りをうろついている。
無心に見ているうちに背筋に鳥肌がたった。ゴミのよ

うな褐色のゴキブリが見ている前で膨らんでゆく。油
でぎらつく無気味な節足動物が壁に映る私の影より巨
大となり、血走った両眼が私を睨んでいる。幻覚か？
いや、そいつの長い触角は鞭のように唸って私の疑い
を覚まし、この存在を見ると逼ってくる……ああ二千
人の虐殺体から流れる悲鳴が私の幻覚を否定する。

「一日として酒なしには眠られず
一日としてたたかいたなしに生きられなかった」
金芝河は今日も生きている。
たぎる自由は囚われることで翼を持ち
プロメテユースの火が闇に閃めく。
うす汚れた日本語の詩よ
海を越えて羽ばたく巨大な風が見えないか。
「二行目」が書けないおまえの詩は
異国のゴミ箱に吐かれた反吐の臭いがする。
「自分のために書く」という滑稽をやめよ。
アルコールで消毒された魂は
透明な海月となって
暗い海の上を孤島の灼けつく砂上を
漂い
どこへ行くのか。
真紅の足跡は蒸発した。

南の島

緒方宗平

背にした杉山は小高く
紺青の海にうかぶ小さな島。
おだやかな波の白い波頭が
島をささえる波状岩の
侵食作用をくりかえしている。
熱帯植物が自生し
びろう、はまぐみ、はまびわ
繁茂するのは珍しいものばかり。
海も空も砂浜もまぶしく
岩をおこして
貝をひろう人や
突堤に釣をする人がいた。
一丁の銃も
骸もころがっていない
列島のはての南の島に
汐風が吹きつけ

あやしく燃えたっていた。

1980. 7. 11

カンナ

夏ともなれば
カンナが咲く
あかいあかい花である。
庭のすみに
道のかたわきに
おがたまの並木のなかや
公園の芝生のなかに。
いつか
農家のまえをとおっていて
そこでみた
梅の木のそばの
一群れのカンナ。
太陽がきらきらともえ
風がなまぬるく
ものみな懶いなかに
そこだけが
あやしく燃えたっていた。

1980. 9. 15